

さくら児童クラブ指導員研修 IV

平成27年3月5日(木)

18:30~

異年齢集団の中で「生きる力」をどうつけていくか…

参加者：60名



講演者 九州女子大学教授 大島 まな
井関にこにこクラブ主任指導員 上野 敦子

大島：「学童と学校と地域が手を組んだらこんなことが出来ました」という話をしたい。さくらでは、平日のこの時間に様々な人が集まることがすごいと思う。さくら児童クラブが悩んでいることを、昨年、大洲で開催された地域教育実践交流集会で、谷川さんに出会い聞いていた。今からお話することが、松山での取り組みに参考になるかどうか、選び取ってほしい。

上野さんとの出会いは、平成16年、山口県地域リーダーの養成講座でのこと。福岡から三浦清一郎さんと2人で講師を務めた。そのときの受講生が上野さんだった。

30数年前、当時大学院生だった私は、「教育とはなにか」という疑問から青少年キャンプに参加した。最近の子どもたちは、必要な体験をしないまま大人になっている、たくましく生きていく力がない、どうすればいいのかと思っていた。事業直後の保護者の感想では、親に対する感謝の言葉があり家事も手伝うようになったと喜んでいたら、時間が経つにつれ「元に戻りました」という声が聞かれた。

つまり、一過性ではなく繰り返し行っていくことが大切。日常の生活の中に入れ込んでいかないと、本当に必要な力が身につかない。日常生活圏での日々の教育プログラムが必要、いつかやりたいと思っていた。山口で出会った上野さんは、学童保育の先生、ここで教育プログラムを実施すればいいモデルになるのではないかと、できる証明となる。「生きる力」のベースになるものは、体力と耐性。体力と耐性がしっかりしていれば、

あとの積み上げは容易である。その上に学力をのせるのは容易い。上野さんと意気投合して、学童保育の日常に、意図したプログラムをいれることができた。

女性の社会参画推進で、子どもが少なくなっているにもかかわらず、学童保育のニーズは増えており、サービスが追いつかない。ワークライフバランスは、経済的に厳しい中では難しい。女性が社会に出ても、育児休暇は取りにくい状態であり、しわよせは子どもにいく。共稼ぎで子どもに接することが少ないので、家庭教育が行き届かない可能性が大きくなる。母親が働いたら家庭教育がだめになるとはいえないが、過ごす時間は少ないのは確かである。その中で、家庭ができない部分を社会が保障できるかどうか。家庭の教育力が低下したと言われるが、その原因は母親が働きにでたからそれが悪いという声が聞かれる。今は、お母さん、働いてくださいと勧められている社会。家庭格差もある。教育熱心な親、そうでない家庭、経済的な面、家庭教育は親の責任だけれど、親がそれだけのことを子どもにしてやれない。放置されている子等について、子育てを親の責任と言ってしまえば、わたしたちはそのような子を見捨てることになる。

このような時代には、どんな家庭の子どもでもこの地域で育つ子はみんな「生きる力」を育む機会が与えられるという社会のセーフティネット、すなわち「養育の社会化」が必要である。

にもかかわらず、現行の学童保育は子どもの発達支援の視点を持っていない。国の政策の中に、健全に育成するための成長発達支援の視点がない。児童福祉法の発想は、世話と保護、ケア、預かって時間が経つと、無事に家庭に送り届ける。それだけでいいのか、何かをするか、どうかで子どもの成長はかわる。

学校教育より、学童保育の時間の方が長い。何かをやるかどうかで随分違う。親もわが子をより良い方向に持っていくために、子どもには躰をしてきた。昔は、家庭の手伝い等意識はしていないけれど、生活の中には見えないプログラムが隠れていた。豊かで便利な生活、都市化、核家族化等の中で、教育的な体験はほとんど消えてしまった。

しかし、学童保育ならできる。学校が終わった時間から。お勉強ではない。体力と耐性をベースにして。今の子は体力がないので体を動かすという意図的なプログラムをつくる。また、我慢する力がないので授業も成り立たない。やりたいけどやっちはいけないこと、やりたくないけれどやらなければならないことが社会生活にはある。身に付けていかないと一人前になれない。みんなで一緒にやることで、がまんできる。耐性のプログラムもつくった。具体的になにをやって、子どもたちがどうかわかってきたかを上野先生に語っていただく。

上野：現在、郷土の偉人「長州ファイブ」の物語、論語かるた100句、古典俳句47句、1年～6年までみんな覚えている。運動もとび箱、マット等、運動を指導できるような者がいない指導員のもと、ほとんどの子どもは跳び箱もマット運動もできるように

なった。

平成10年から指導員を始め井関小学校は4つめの学童。学校の中にある児童クラブだった。理解しがたい子どもの言動等がみられた。1週間のプログラムを地域を巻き込んで実践した。1週間して算数の苦手な子どもが算数出来るようになる。保護者より「続けてください」地域の力を活用するため口コミで協力者を探す。そのようなとき、阿知須地区の女性グループに声をかけて、大島まな、三浦清一郎先生の研修を受けた。その折、福岡の三浦清一郎先生からつまらないと言われ、くやしいからついていった経緯がある。当時の学校長は、学校の施設をお使いくださいといってくれた。施設を借りて、地域の人も入れて始めたが、他の地区から井関だけ目立ったらいかんとも言われた。

講義を受けて持って帰っただけである。保護者の意見を聞き、親鳩会を発足、地域の俳句等教えてくれる人も探した。3年間の補助金ももらった。ほとんどが交通費と謝金に消えた。3年終わって、「子どもは変わったが証明が出来ない・・・」ことに、三浦先生大島先生から、数字に表してみないかと言われた。

社会福祉協議会が母体、上司の理解が必要だった。保護者会をして、全員の協力同意書をもらい、学校からも空いていればすべての施設を使ってもいいと言う許可をもらって始めることが出来た。鹿児島県のヨコミネ式保育園へ視察に行った。そこで逆立ちで歩く子どもや3歳で字が書ける子どもを見て、このプログラムを取り入れることにした。

学校も学力が上がるので応援するといわれた。指導員ができることは限られているのでたいへん迷ったが、わたしたちは笛とキッチンタイマーで子どもの時間を管理することだったので大丈夫かと。三浦先生から3回の発表会をするといわれたのではりきったこともある。

約束が3つ。必ず、教えに来てくれた人を先生と呼ぶこと。地域のおばあちゃんが来ても、その日は先生と呼んでもらう。大人はよく知っていてかっこいいと思わせる。「先生」が来た日は、「今日はよろしくお願ひします」と言えるように。

わがままはきかないことが2つ目

3つ目は叱るときは、ちゃんとした理由づけをして叱ること。

ドリルも毎日行った。全部ノートが終わったら、ご褒美がある。ドリルやって100点取ったらシール。遊びにもシールを貼る。1年～6年まで一緒である。

事故にあったT君という子がいる。来たときは匍匐前進で歩けない状態だったが、プログラムのおかげで今では走るようになった。俳句もすべて覚えている。右半分完全麻痺で、紙おむつだったが、学校と保護者の3者でどのような方向で考えるか話し合い、自立に向けて支援した。他の子は自分でトイレに行っている。男の子なのに女子トイレ入らなければならないことがくやしいと、現在はオムツも取れて、自分で男子トイレに行っている。トイレの自立ができたことはT君の人生にとって大きな意味があると思っている。

じゃんけんゲームなどグミ1個ほしいがためにみんながやる。とれなければくやしがる。それならばと親が買ってやると、そのようなものはいらぬというらしい。自分で勝ち取ったグミだからこそ価値があるのだろう。競争させることが大切。三浦先生のプログラムは、気を付けの姿勢、びくともしない立ち居、跳び箱、マット、ドリル、分からない子も分かる子も同じようにその子に合った配慮をしてドリルをさせる。

親の帰りが遅くなっても、お腹が減らないようおやつはおにぎり。もちろん自分で握る。

頑固棟梁の大工教室も開催した。棟梁にはカンナとクギをもってきて、大人のかっこいいところを子どもにみせてくださいといった。また、雑巾をみんなで縫ったが、指導者の大人は、子ども41人に対し、41人の大人。1対1で教えてもらった。何が良かったかといえば、その様子を見て保護者が出来あいのものではなく家で雑巾を縫うようになったことである。

水泳教室や保護者に科学の授業をしてもらったりしている。子どもたちはマットや跳び箱をするときには自分たちで出し、自分たちで片付ける。掃除もする。

九州女子大学の教育プログラム導入が始まって、ドリルや論語などにも取り組んだ。指導員と一緒に覚えた。子どもたちはかるたでほとんど覚えたようである。体育館での跳び箱指導や気を付けの指導もしていただいた。

地域の人が、来るのが楽しくなった、子どもと一緒にやるのが楽しいと言われる。地域スポーツクラブ指導員には、こちらから教えてもらいたいものを決めた。子どもたちは夏の発表会では全員ブリッジが出来るようになった。算数教室、長州ファイブ暗誦等、グループで競争させてできたらあめを与える。三浦先生から、3回の発表会をすると言われたので、そちらに向けても頑張った。

多目的ホール、昼間は学校、放課後は学童で借りている。運動の苦手な子、跳べるようになった。「すごいね、上手だね」といったら伸びた。三浦先生からは、跳び箱は「人生をとんでいる」と言われた。子どもはやったことを褒めたらひびる。前出のT君も、5段まで乗り越えることが出来た。夏の発表会の朗読、場面寡黙の子どもも第3回の漢字チャンピオンになって、口が開くようになった。最終の発表会には、全員が長州ファイブを全部覚えた。子どもは跳び箱もとべるようになった。

地域指導者には、学習の見守り、採点は、更生保護女性会の方々にお願いしている。地元の人が聞きつけて、文化祭やデイサービスでの発表会等の要請もある。発表会で1分間のブリッジをしたが、競争するのでだれも止めない。毎日しているラジオ体操は英語、活動の最初に必ず体操やマット運動などの柔軟を入れて身体をほぐすようにしているため、みんな怪我はしないので保険を使うことはほとんどない。以前、赤ちゃんとのふれあい体験をしたが、手を引っ張ったりしてたいへんだったが、今回は、上手にあやしていた。加減がわかったようである。

今年2月14日の山口フォーラムでは長州ファイブの朗読をした。指導員が出来なくてもやろうと思えばできるということを痛感した。

今年は戦後70周年なので、昭和万葉集に挑戦する。

大島：学童は学校ではないので、あくまでも勉強をさせているわけではなく、遊びと生活の中でしている。ただ、「宿題をさせてください」と保護者の強い希望があるので、宿題とドリルの時間は15分間に限ってとっている。15分を過ぎるとあとは家庭でやりなさいということにしている。限られた時間の中で集中してすることも大切だと思うので。

また、子ども同士で教え合うこともある。課題の暗誦はふりがなをつけていない。耳から聞いて覚える。グループで競争させるので、遊びの中で、あっという間に覚えていく。漢字も読めるようになった。暗唱できるようになって意味を教えていく。

跳び箱も飛び越す遊びにチャレンジである。指導ではない。前の子が飛ぶ、どかないと次の子がやってくる…、そのスリルで子どもは熱中する。できたときにはご褒美。その連続である。

質問

Q：興味のない子を全員こちらに向かすにはどうしたらいいか。

A：毎日していることは、強制ではない。できれば褒める、褒めて育てている。1年の計画を立てるが、身についたら生活に溶け込んでいく。

Q：学校の立場からすると、跳び箱を跳んで怪我をしたとなると、学校の用具なので頭をさげることになる。いろいろなものを共有してというのはとても難しい。どうしても線を引きたくなる。けんかしたことを学校に持ち込まれても困ることもある。

A：学校の施設を借りているとはいえ、学童でしたことは学童で、学校に持ち込まないようにしている。子どもが怪我をした。保護者は学校に言いに行ったが、学童でのこと、通院は責任を持って指導者がした。そのことがあって、保護者に信頼してもらえるようになった。

Q：地域の人が41名関わってくれたとのこと。どのようにして集めたのか。

A：更生保護女性会の会長、副会長を連れて、三浦、大島先生の研修会に行った。よいキーパーソンになってくれて、口コミで広げることができた。

Q：跳び箱などは個人差がある。一斉には出来ないと思う。発達段階の違いなど、どのような目標をもってしているのか。

A：色々な段階がある。跳び箱であるにしろ、かるたを覚えることにしろ、その子の能力にあったところがあれば指導員が褒めることにしているなので、そのことでもめることはない。

Q：すべての子どもの特性を理解しているのか。

A：していない。跳び箱が跳べることが目的ではない。跳び箱が苦手の子はマット運動

をする。すると、腕の力がついてきて、跳び箱が跳べるようになったりする。自分のやりたいことをする。やっているときになる。すると、楽しくなってくる。

Q：遊びの中でというが、どのようにとらえているのか。

A：することが楽しい、それ自体が目的なのが遊び。漢字を覚えることが目的ではなく、グループで競争することが楽しく、勝てばグミがもらえる。結果的に字も覚えるが、勉強ではなく遊び。

Q：子どもの時間制限、どのようなプログラムでしているのか。

A：子どもたちは3時、4時、5時とばらばらに来る。まずは、起立して気を付け、3つの約束、ラジオ体操、跳び箱、ドリル遊びなど、40分で終了。あとは、自由時間である。長期の休みの場合は、地域の方の指導、お礼に長州ファイブを聞かせる、午後は自学自習をして3時のおやつタイムが終われば自由時間。